

令和七年度

総合型選抜

小論文問題

〔注意〕

- 一、問題冊子及び解答用冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。
- 二、受験番号は、解答した問題の解答用紙の受験番号欄（一枚につき二ヶ所）に正確に記入すること。
- 三、問題冊子のページ数は、表紙を除き十一ページである。脱落している場合は直ちに申し出ること。八ページから十一ページは、下書き用紙である。
- 四、解答用紙は二枚である。解答用紙をミシン目に従って切り離すこと。
- 五、解答用紙は持ち帰ってはいけない。
- 六、問題冊子は持ち帰ること。

次の文章は江原由美子「孤独な「舞台」——現代女性とインテリア」（一九八五年）の一部である。これを読んで、後の問一〜三に答えなさい。

「住居」が単にその機能性によって求められるものではなく、富や権力の象徴として求められるものであることは言うまでもない。権力者の実例をひくまでもなく、現代のサラリーマン諸氏にもそうした意識は根強い。何千万もする一戸建住宅をローンで買い求める意識の奥底には「男なら家の一軒くらい」という意識がいくらかはあるのであろう。「住居」が単に「住居」とどまらず象徴になってしまっているのは、女性よりも男性においてよりはっきりしているといえるだろう。男性は「住居」におのれの経済力を「見る」ようにさせられているのであるから。

それに比較して、女性向けインテリア雑誌の示す女性の「住まい」への関心は単にハードウェアとしての「住居」の価値に向けられているのではなく、むしろソフトウェア「住み方」「住みこなし方」に向けられているようである。これは女性と「住居」のイデオロギーを反映しているようで興味深い。「住まい」は女性の「本来の」環境とされている。「住まい」においてこそ、女性はその才能を余すことなく発揮し、生活を豊かなものにしうるのである。それゆえ女性にとっての「住居」は、自分の経済力や権力の象徴ではなく、より直接的な、生活能力——ハウスキーパーとしての能力、生活演出者としての能力等々——の証しである。さらにいえば、「住居」は女性の人柄を示すものとされており、女としての価値や幸福度の証しでもあるのである。手入れのよく行き届いた、美しい家は、その女主人の人柄や能力、幸福度を証明するものと「見られる」のである。

インテリア雑誌が写真を通してわれわれに「見る」ことを強制するのは、この「うち足りた女の生活」という幻想である。個性的な住まい、知的な空間、やすらぎの部屋等々、それらの写真はその部屋に住む女性の「豊かな」生活を証明する。そこに繰りひろげられる愛情に充ちた、おだやかな、あるいは刺激的な暮らしを「見せ」てくれるのである。インテリア写真には人物は登場しない。だが映像が室内を通してえがき出すのはそこに暮らす人物なのである。だからこそインテリア写真の中には、あたかも今ま

で人がいたかのようにコーヒーカップがテーブルにおいてあり、長いすには雑誌がひろげたままになっているのだ。

人物が写真の中に不在であり、なおかつ人の居ずまいが感じられる室内写真は、それを見る女性に、あたかも自分こそがその部屋の住人であるかのように錯覚させる。美しい部屋に住むにふさわしい女主人公になったような気持にさせるのである。多くの女性がインテリア雑誌に注ぐ熱い視線の中には、インテリア写真の部屋の女主人公に自分を同一視するこうした心理があるのではなからうか。

だが、だからこそ、女性が自分の室内に注ぐ視線は、それを「外から」みる視線となってしまう。

室内とはもともと「私的」な空間であるはずなのに、その室内に注がれる女性の視線は、その室内を第三者の眼から見る視線となる。第三者の眼からみて、自分の「私的空間」がすばらしいものとしてみえるように気を配る視線となる。なぜなら、女性にとって「私的空間」こそ、まさしく自分の価値を確認し、証明してくれる空間だからである。女性の価値は「私生活」にこそあるゆえに、その「私生活」における幸福、成功の度合が、まさしく「私的空間」たるインテリアによって示されるといふわけである。多くの女性が自らの室内に注ぐ熱い視線の中には、おそらく自分の女としての「充ちたりた生活」を、第三者に証明したいという意図があるのである。

だが、いったい誰に向かつて証明するのか。室内空間は外に向かつて扉をとざすことで「私的空間」に変質しえた。社交習慣を持たぬ日本の家庭は、伝統的な親せきづきあいを拒否してしまえばまったく孤立した空間となる。地域社会も伝統的な「家」を単位として構成されており、それが風化した今、新しい地縁的人間関係の確立は不十分である。家族成員はそれぞれ、家庭という枠をはずれて、個人として職場や学校に友人・知人を見出している。家庭はそうした家族成員が羽をのばす「私的な」密室にすぎない。女性が自らの価値を証明すべく、自分の思いどおりにしている室内はそうした密室なのである。意のままにさい配をふるえる女性の、その主婦としてのあり方自体が逆に、今日の家庭において主婦以外が「外にひっぱり出され」、家族が不在となりかたっぽになった様子を明白に示しているかのようである。

室内装飾に向かう視線はあくまで個人のものである。それは個人の趣味による室内の雰囲気の一掃を不可欠とする。もし今日

の女性が、自分の部屋、または自分の家を持たぬとしたなら、戦前の直系家族制のもとでのように、嫁として「家」に入ったとしたならば、「自由に」インテリアを考えることは不可能である。

伝統的な「家」の空間は、「共同的空間」として、個人の趣味によるインテリア・コーディネートを拒否するからである。戦前の日本の室内空間は、女性の個人的趣味や好みが室内に反映される余地はあまりなかった。室内はほとんど「家」という共同的空间により規定されており、先祖や伝統によりその変更は厳しく規制されていた。

戦後の家族の変化は単に同居する人間の数やカテゴリーの変化をもたらしただけではない。家族の住む「家」という空間の、完全な変容をも伴ったのである。すなわち「家」は、伝統的な共同的空间ではなくなり、完全に「私的空間」に変容したのだ。家庭は個々の成員の「自然な欲望」を充たし、成員相互の「自然な情愛」を満足させる外からしや断された「私的空間」として位置づけられた。核家族化は、「家制度」の中の「自然な欲望」や「自然な情愛」の抑圧を嫌い、外からしや断された「私的空間」を確保しようとした戦後世代の要求により促進された。

そしてこの「私的空間」は、戦後の高度成長に伴う様々な耐久消費財を室内にとりこむことよってさらに伝統的な空間意識や秩序観を完全に払拭していった。^(注)上野千鶴子氏はベッドやダイニングセットは、戦前おとしめられていた性欲や食欲が「私的空間」において市民権を得た象徴であったと分析する。狭い日本の都市の住宅事情からすれば、空間のムダ使いでしかないこれらの家具が、かなりの普及度を示したのは、単に機能性では説明がつかず、その象徴としての意味を考察しなければならぬことを示した点で、卓見であった。

そして核家族化を積極的に推進し、ベッドやダイニングセットなどの家具の購入を積極的に担っていったのが戦後の若い女性たちであった。彼女らは、親の世代と同居したり、別棟をたてたり、親世代と「居住空間」を完全に分離したりして、自分の「自由にできる」空間を手に入れようとした。家庭の外でいくらでも「自由な」空間——第三空間を満喫できる男性とは異なり、女性は家庭の中に「私的空間」を手にするこゝではじめて、「私的な欲望」や「私的な情愛」を満足することができたからである。

そしてこの「私的空間」の確立こそ、女性がインテリアに関心を払うことのできる条件であったことはすでに述べた。現代の女性性は結婚すれば皆すぐに主婦となる。すなわち、家の中で絶対的な管理権を持つ存在となるのである。この絶対的な室内空間への支配力と、伝統的な空間秩序規範から「自由で」あることこそ、インテリアを個としての女性の表現として位置づける条件である。

だがまさにこの条件こそ、家庭という住空間の空間としての価値下落を意味しているのではなからうか。すなわち家庭という住空間が人生における重要な出来事や儀式をとり行なう場ではなくなってしまったことを意味してはいまいか。「家制度」下の「家」は、人生の重要な出来事がほとんどすべてそこで生じる空間であった。今日家庭は、単に日常的な欲求を処理し満足させる場ではない。誕生や死や結婚、その他様々な重要な出来事は家庭の外でおきる。かつて「家」空間はそれ自体、社会であった。だが現在家庭は、社会から切りはなされた密室にすぎない。現代女性が主婦となって手に入れる「私的空間」は現代女性を社会から切り離す牢獄でもあるのである。

そして、女性が「私的空間」を入手し、巣づくりにはげみ維持しようとした「私生活」の幸福というものも「幻想」ではなかったか。むしろ、この「幻想」は実際にわれわれをつき動かし、労働にかりたて、日常生活における実際の目標を設定したという点で「現実」であった。だが、高度産業社会の中で、いや応なく家族成員は企業に学校にと狩り出され、その全精力を家庭外で使い果たしてしまい、家庭という住空間はその内部的な生活展開を不可能にさせられていった。家族はそれぞれのタイム・スケジュールに従って生活するにすぎず、家庭は個々の家族成員の個々の欲求の充足の場ではなくなってしまったのである。個々の家族成員を労働にかり立てたのは「私生活」の幸福のためであったかもしれぬ。だがその結果として家庭は、からっぽの巣となってしまったのである。

むしろ、現代社会でも家庭でほとんどの時間をすごさざるをえない人々が多い。子育て期の主婦や当の乳幼児、病人や老人をかかえた主婦や病人、老人等は、その生活時間のほとんどを家庭ですごす人々といえるであろう。だが現在のインテリア雑誌にあらわれる室内写真はたいいてい、こちらの人々とは無縁である。もっとも広い住宅が必要なはずの子育て期の若夫婦にはそうし

家をたてられる財力がないのが普通である。家を入手できるのは、もう庭で遊ぶ子どもがいなくなった四十年代、五十代になってからである。

障害者や病人、老人をかかえた家庭も同様である。これらの家庭こそ、家庭ですごす時間がかなり多いゆえに、もつとも快適な住空間を必要としている。だが、こうした家庭はたいていその時間的・労力的・財政的余力がない。主婦ひとりだけで努力しても、介護だけで力尽きてしまう。インテリア雑誌の示す室内空間は、これら家庭でほとんどの時間をすごす人々とは無縁の世界である。

なぜなら、人々がインテリア写真に求めるものは、この高度の消費社会での成功と幸福の証明だからである。美しい室内写真は「私生活」の豊かさの証明である。だが、だからこそ、これらの室内写真は空虚な「私生活」の証明であるかのようなのである。それはたった一人「私空間」にとり残された女性が、自分の幸福さを自ら証明するための孤独な営為であるかのように思える。

インテリア雑誌の室内写真はほとんど洋間である。その写真は、人物がいなくとも、その居ずまいを感じさせる。イスやテーブルはそこでどんな姿勢で人物がすわるか、その表情までも示すかのようなのである。窓ぎわのテーブルとそこにさりげなく置かれた一輪の花は、テーブルにほおづえをつき窓の外をながめる若い女性の姿を想像させる。ゆったりしたソファはそこでくりひろげられる一家団らんのを想像させる。日本間ならば、家具がないゆえになかなか写真になるまい。たまに日本間の写真があっても必ず座ぶとんや座卓が出ているのは、そうした居ずまいを感じさせる効果をねらっているからにちがいない。インテリア写真に洋間が多いのも当然であろう。

だが皮肉な見方をすれば、こうした家具の室内への氾濫はまさに家庭という住空間における家族の不在を示すものと考えるところもできまいか。ベッドやダイニングセットは、「私的空間」の象徴として、家庭内に据えつけられた。それらの家具は、家族が不在の時も、家族の愛情や結合の象徴として「私的空間」に君臨したのである。ソファもリビングルームも、ロッキングチェアも、人がそこにいなくとも人間の存在を感じさせる何かを持っている。それらが狭い日本の住空間の条件を無視した形で「私的空間」に大量に導入されたのは、「私的空間」の空虚さを満たすためではなかったか……。

であるとするならば、その室内において、インテリア雑誌に見入り、「私的空間」を美しくみせるべく努力しつづける女性の姿は、まるで、人形の家であそぶ女の子のように、自分一人でお話をつくり空想にふけているかのようである。誰もその室内を見るわけでもない。ただ自分の創り上げた自分の理想の姿に自ら裁断を下しているのである。……その営為は他者とまじわるこ
とがないゆえに孤独である。その室内が美しければ美しいほど、その執念の強さが孤独の度合を示すかのようである……。それは鏡の地獄である。自分を見る者が自分であり、そしてその見ている自分をまた自分が見る……。①
は、こんな悪夢を感じさせる。きっとそれは単に自分の心根を垣間みたせいにすぎないのであるうけれども。

(出典…江原由美子『増補 女性解放という思想』(ちくま学芸文庫、二〇二一年)

なお、原文を一部省略・改変した箇所がある。

語注

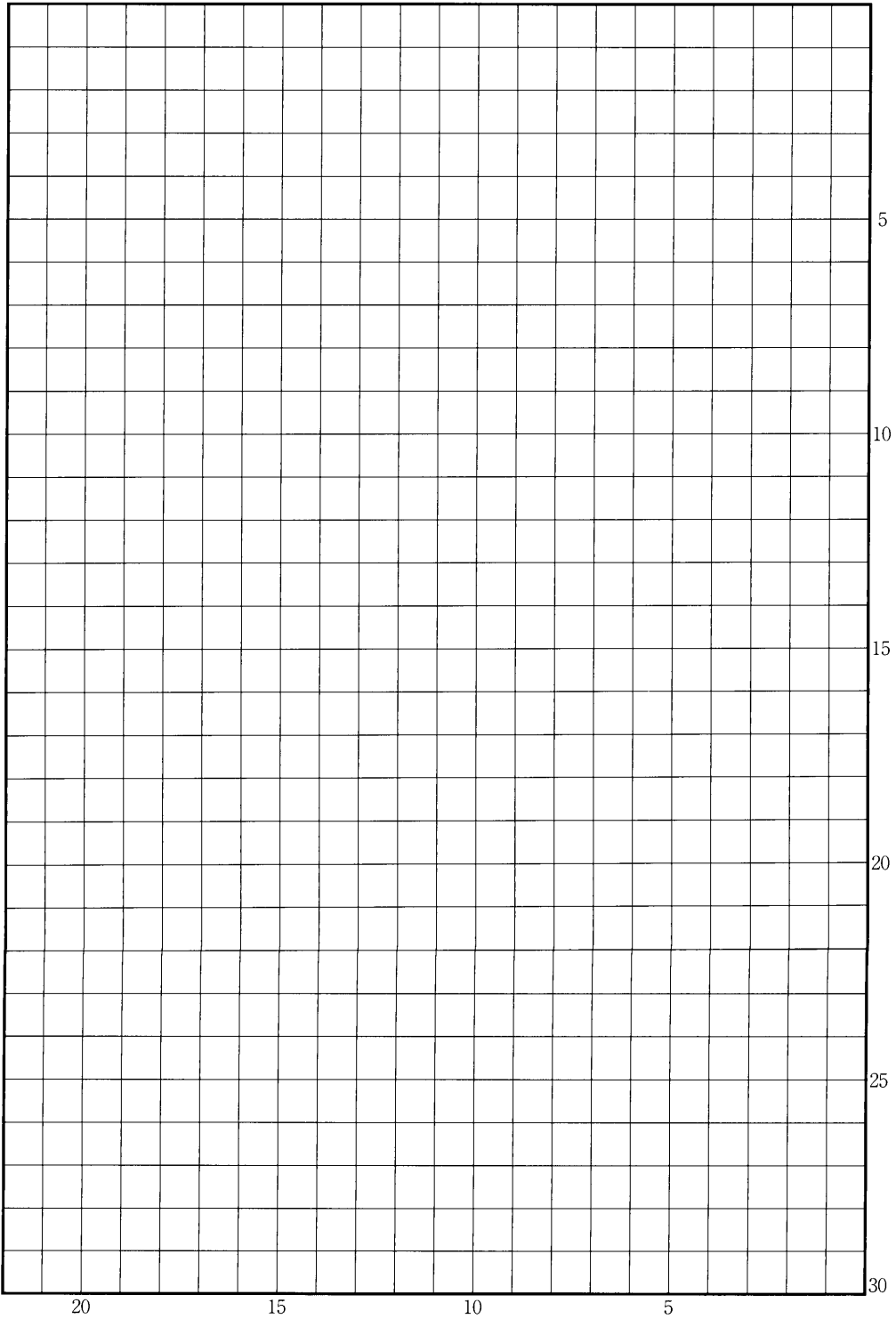
(注一) 上野千鶴子——日本の社会学者。

問一 傍線部①について、著者はインテリア雑誌の室内写真が悪夢を感じさせると述べている。あなたはさまざまメディアでの室内の写真や映像にどのような印象を持っているか、その理由を含めて具体的に説明しなさい。(二〇〇字以内)

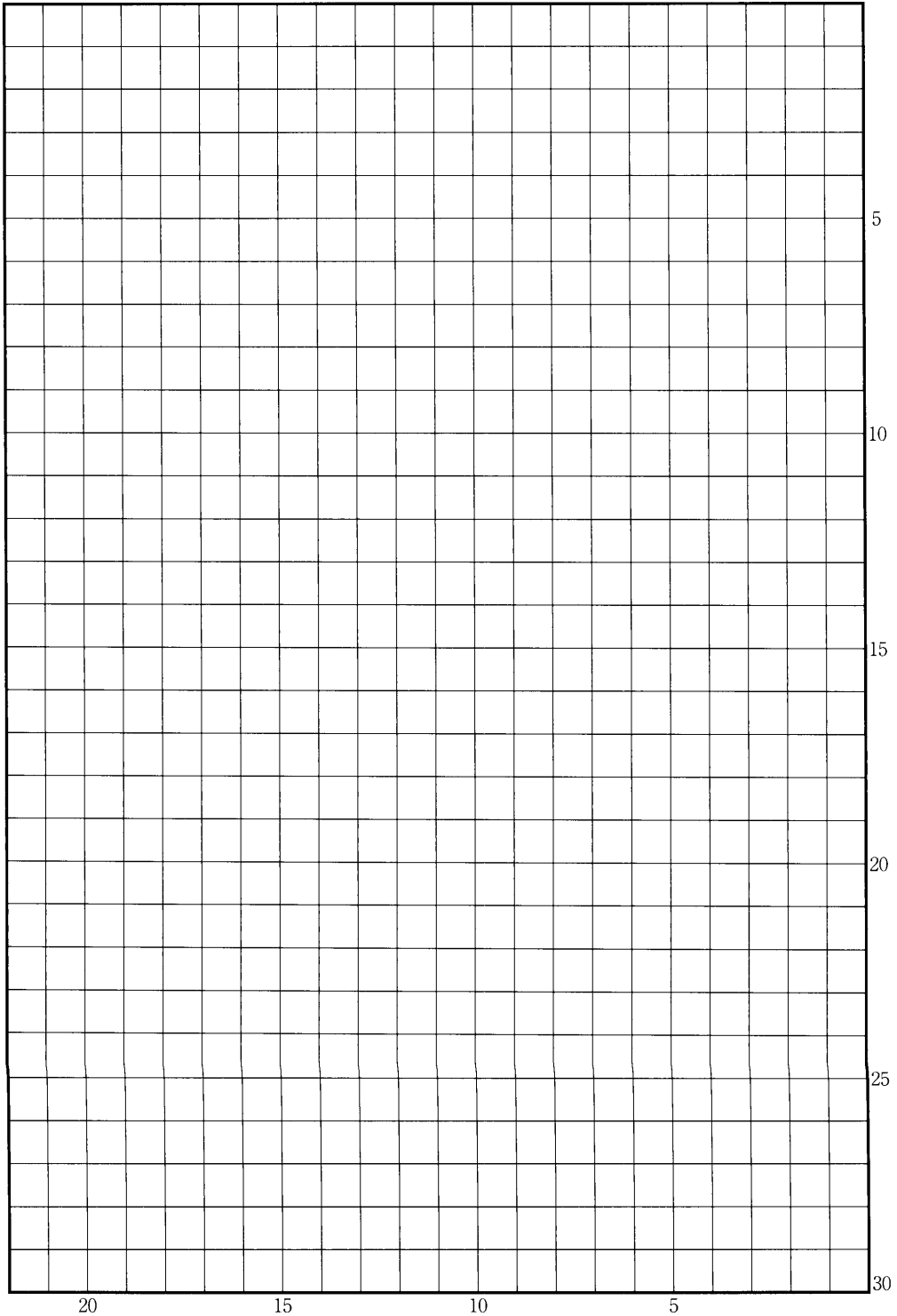
問二 この文章で筆者は「家」という空間の変化を戦後の家族の変化と関係づけて論じているが、この関係についての筆者の考えを説明しなさい。(二〇〇字以内)

問三 この文章は一九八五年に書かれたものであり、現在の社会の状況は執筆当時から変化している。この文章の内容、およびこのうした社会の変化を踏まえて、現在の社会において「家」はいかなる空間となっているのか、あなた自身の考えを述べなさい。
(八〇〇字以内)

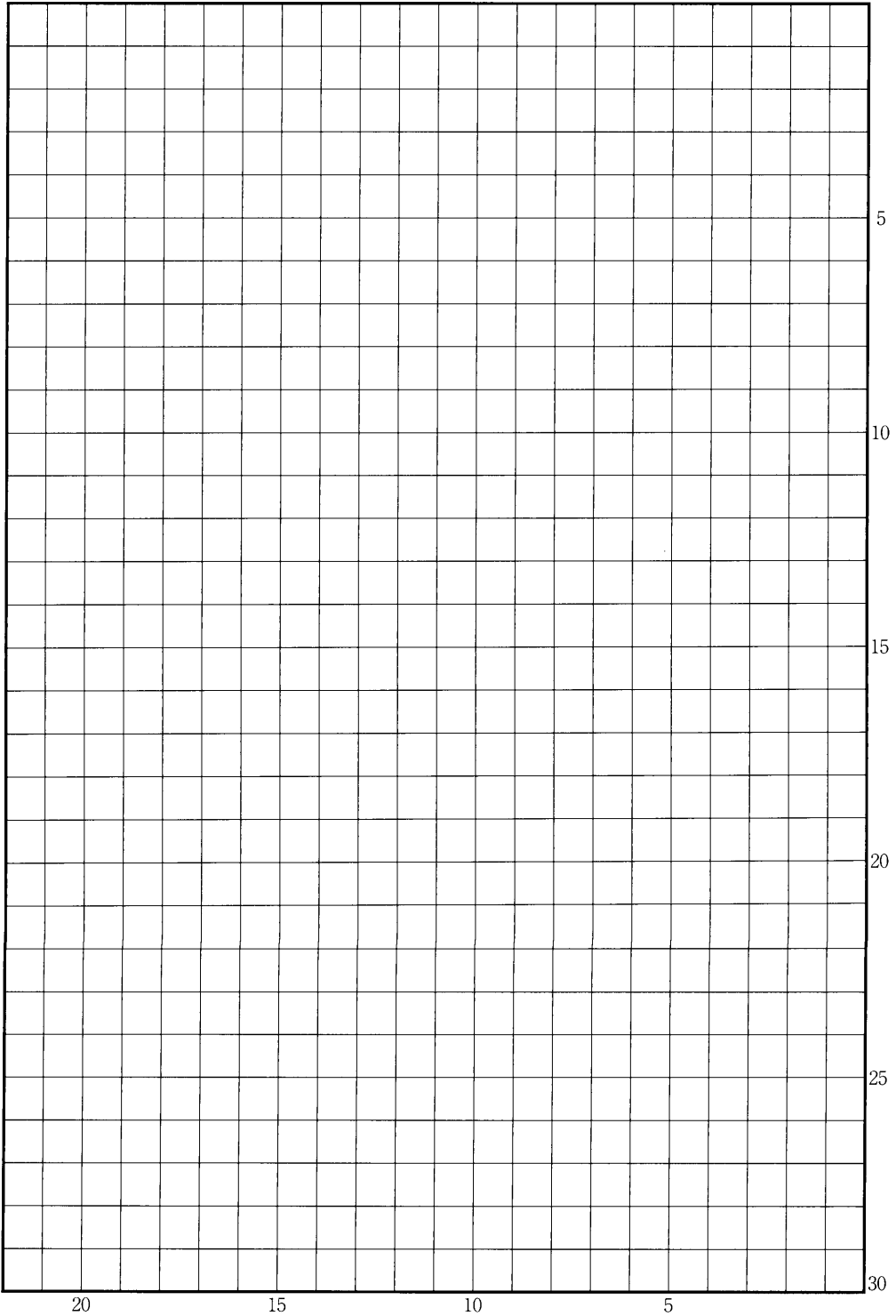
(下書き用紙)



(下書き用紙)



(下書き用紙)



(下書き用紙)

